2009.1.21

VOL.3

あかねさす

EU-日本学NEWS

Program for EU-Japanology Education and Research（PEJER）

目　次

1 The Program for EU-Japanology Education and Research and its International Workshops
2 KU ワークショップ実施報告
4 KU ワークショップ実施報告
6 フィールドワーク実施報告
編集後記

The Program for EU-Japanology Education and Research and its International Workshops

The strength of the Program for EU-Japanology Education and Research is that it offers the students the opportunity to participate in international workshops both in Japan and abroad. Although international workshops might be considered common in academic programs nowadays, one must not underestimate the efforts that students undertake in order to actively contribute to them, especially in a foreign language. It is also important to stress the experience that students gain from these events.

The wide range of research topics discussed in the first KU Workshop in July provided the students of Kansai University an initial glimpse of European Japanology. I hope that the Japanese students were as impressed as I was with the quality and the advanced contents of the presentations of their young European counterparts, not to mention their Japanese proficiency. This clearly shows that the field of Japanese Studies in Europe is evolving positively. I must also admit that I was equally impressed with the academic vigor shown by the Japanese graduate students in the cooperation and communication with the European scholars, particularly in some of the vivid discussions that followed their talks.

In September a substantial delegation from Kansai University visited the Katholieke Universiteit Leuven for the first EU Workshop. Although the participating students had the option of presenting their research in Japanese, many chose to do it in English instead. Preparing for such an international workshop abroad is obviously not an easy task and therefore the faculty members in charge of the EU-Japanology Program opted to organize an English training seminar during summer, which was held in August under my supervision. This seminar consisted of a theoretical and a practical part. The first part was primarily meant for students who were not taking any academic writing classes during the semester, but also served as a review for the other students. It stressed basic writing principles, useful vocabulary in the field of Japanology and expressions for presentation purposes. The second part concentrated on composing and correcting papers. I was glad to see that the students were very motivated and I was surprised by the determination and fervor shown even by students with lower English abilities.

Although I did not have the chance to participate in the EU Workshop myself, students, staffs and faculty members expressed their satisfaction about its overall outcome. Upon their return from Belgium, I gave my students the task of writing about their experiences in Leuven in order to allow me to grasp some of the impact of their trip. Despite the fact that some of them were disappointed by the low turnout of local students, they were enthusiastic about their short stay abroad and exchanging ideas with Belgian Japanologists at the workshop.

When evaluating the workshops, it is important to consider not only their academic contents or validity, but also to keep in mind the international dimension. Nobody doubts that writing and presenting a paper in English will improve the English abilities of students; however this is not the sole international aspect or role of the workshops. Giving students firsthand experience in presenting a paper in English in an unfamiliar environment and stimulating cooperation with scholars from abroad enhances the students' transcultural communicability, which is indispensible in this global age. It is exactly herein that the strength of the Program for EU-Japanology Education and Research lies. I hope that the Program will continue stressing these international facets.

関西大学大学院　非常勤講師　David Uva

ＫＵワークショップ　開催報告

平成 20 年 7 月 4 日（金）～ 7 月 6 日（日）

関西大学で開催された第 1 回 KU ワークショップは、EU 諸国において日本研究に取り組む研究者を招き、海外における日本研究の動向に接する機会となりました。記念講演会では源氏絵の研究者であるエステル・レジェリー＝ボエール氏、日本の法制を研究するディミトリ・ヴァノヴェルベケ氏を迎えました。２日目には、イギリス・ドイツ・フランス・ベルギーの大学に在籍する若手研究者と関西大学の院生が報告を行い議論を交わしました。最終日には、海外からの参加者と共に大阪文化に接するフィールドワークを実施し、互いの交流を深めました。

●プログラム

2008 年 7 月 4 日（1 日目）　会場：関西大学第 1 学舎 A 301 会議室

記念講演

Dr. Estelle Leggeri-Bauer（フランス国立東洋言語文化研究院 INARCO　准教授）
「フランスにおける源氏物語絵画の研究」

Dr. Dimitri Vanoverbeke（ルーヴェン・カトリック大学日本学科　教授）
「地域研究から見る司法制度改革」

参加者：85 名

2008 年 7 月 5 日（2 日目）　会場：関西大学尚文館

セッション 1：周縁から「日本」へのまなざし

司会　**山口 哲史**（EU - 日本学教育研究プログラム　ティーチング・アシスタント）
ディスカッサント　**槍皮 瑞樹**（早稲田大学大学院　博士課程後期課程）

森下 真企（関西大学大学院文学研究科史学専修　博士課程後期課程）
「日本文化圏における琉球のグスク時代」

Daniel Heucher（ケルン大学日本学科　博士課程後期課程）
「アイヌ像とアイヌ政策史」

セッション 2：サブカルチャー大国ニッポン

司会／ディスカッサント　**宮元 正博**（EU - 日本学教育研究プログラム　メディア教材アシスタント）

Nele Noppe（ルーヴェン・カトリック大学　関西大学日本・EU 研究センター　リサーチ・アシスタント）
「日本と欧米の二次創作物における物語形式の相違点」

Laurent Bareille（リヨン第 3 大学外国語学部　博士課程後期課程／関西大学研究生）
「戦後の〈不良少年〉の映画的表現」

セッション 3：日本美術の内と外

司会　**豊山 亜希**（EU - 日本学教育研究プログラム　ポスト・ドクトラル・フェロー）
ディスカッサント　**柴田 就平**（関西大学東西学術研究所　アジア文化交流センター　リサーチ・アシスタント）

Doreen Mueller（ロンドン大学 SOAS 美術考古学科　博士課程後期課程／学習院大学研究生）
「江戸時代後期の災害を対象とした記録画の研究アプローチを考える」

谿　季江（関西大学大学院文学研究科哲学専修　博士課程後期課程）
「ジャック・ヒリアーの日本美術史研究とその社会的背景」

セッション 4：現代日本社会の諸相

司会／ディスカッサント　**鈴木 義孝**（EU - 日本学教育研究プログラム　ティーチング・アシスタント）
ディスカッサント　**望月 直人**（関西大学大学院文学研究科教育学専修　博士課程後期課程）

David Eichhorn（デュッセルドルフ・ハイネ大学現代日本研究科　博士課程後期課程）
「ブランドとしての日本―日本のマーケティング戦略に使用された文化的要因―」

Mieke Nakamura-Horckmans（ルーヴェン・カトリック大学日本学科　博士課程後期課程）
「発達障害である自閉症スペクトラム―無知からアセスメントの時代へ―」

セッション 5：日本学の過去・現在・未来

司会／ディスカッサント　**内海 寧子**（EU - 日本学教育研究プログラム　リサーチ・アシスタント）

川崎 千嘉（関西大学大学院文学研究科国文学専修　博士課程前期課程）
「男が子を「生」むという文脈―『古事記』の表現の意識」

田村 唯史（関西大学大学院文学研究科日本史学専修　博士課程前期課程）
「龍でみる日本」

石飛 祐子（関西大学大学院文学研究科国文学専修　博士課程前期課程）
「百鬼夜行の変遷―『百鬼夜行絵巻』から『夏目友人帳』―」

前田　理（関西大学大学院文学研究科国文学専修　博士課程前期課程）
「人形から見た宗教と経済」

岡田 健太（関西大学大学院文学研究科国文学専修　博士課程後期課程）
「『阿娑縛抄』の編纂に至った密教の相承―師資相承にみる日本の教育制度―」

参加者：77 名

2008 年 7 月 6 日（3 日目）

フィールドワーク

大阪水上バス（淀屋橋―大阪城）、大阪城天守閣、上方浮世絵館、大阪府立上方演芸資料館

Dr. Estelle Leggeri-Bauer

Dr. Dimitri Vanoverbeke

セッションの様子

フィールドワークの様子
（上方浮世絵館にて）

ＫＵワークショップ参加者のこえ

私は発表者として参加させて頂いたのですが、発表準備の際に悩んだことの一つが「研究の一般的な説明をどこまでしたらよいのか」でした。自身の研究分野内では口にするまでもない「常識」が、どこまで本当の常識でどこには説明が必要なのかということです。その問題を考えた時、同時に今まで自分の視線がいかに自分の分野にのみ、つまり内側にばかり向いていたのかにも気付かされました。

自分とは異なる研究分野に属する人達が、一体何に興味を持ち、それをどのような意識と方法でもって研究しているのかを学び知ることのできる機会は、まだそれほど多いものではないように思います。それは外国における日本研究についてだけではなく、国内における日本研究についても同様です。国内外の別なく様々な研究分野と交流することで、自分の研究の視野を広げるきっかけを探ること、それがこのワークショップの一つの要素ではなかったかと考えています。

文学研究科国文学専修　博士課程前期課程 1 年　川﨑　千嘉

ＫＵワークショップでは、初めて海外の研究者の前で発表したという経験を得ただけではなく、今まで一番無頓着であった「日本」と言うものを意識させられた。「なぜ日本を研究しているのか」「日本」はどこまでの範囲をいうのか、今まで自分があまり意識したことのないものを考えさせられた。

自分の発表に関して、私は「龍」について発表した。大学生以外の人の前で発表したのが初めてで「もっとうまくできたのではないか」という後悔がかなり残ったが、海外の人の前で発表し、その人たちのモノの見方を体験できたというのはとても貴重な経験だったように思う。

次回は自分の研究をさらに深めるのは言うまでもなく、今回体験した事を活かして、自分の研究をいかにうまく海外の人に伝えるかを意識し、これから研究したいと思う。

文学研究科日本史学専修　博士課程前期課程 1 年　田村　唯史

ＥＵワークショップ　開催報告

平成 20 年 9 月 12 日（金）～9 月 14 日（日）

ＥＵ - 日本学教育研究プログラムに参加する関西大学の大学院生が、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学において報告を行い、海外において日本研究を〈発信・発見〉する場となりました。9 月 12 日から 14 日までの 3 日間の日程で、2 日目はルーヴェン・カトリック大学の院生を交えた若手研究者による研究報告会を開催しました。また、3 日目のフィールドワークでは、各博物館の学芸員から詳しい解説を受けるなど貴重な体験を得ました。

●担当者　藪田 貫、大島 薫、大久保朝憲、豊田真穂（以上、EU- 日本学教育研究プログラム担当教員）
豊山亜希（ポスト・ドクトラル・フェロー）、ネラ・ノッパ（ルーヴェン・カトリック大学　関西大学日本・EU 研究センター特別学術職員）

●参加学生　18 名

●プログラム

2008 年 9 月 12 日（1 日目）

ルーヴェン・カトリック大学図書館見学

オープニングレクチャー　会場：Justus Lipsius Room, Eight Floor of Erasmus Building, Faculty of Arts, Leuven

豊田 真穂　（関西大学文学部准教授）
"Population and Birth Control in the U.S. Occupation of Japan: The Case of Margaret Sanger"

Michael Schiltz　（Post-Doctoral Fellow of the Fund for Scientific Research (FWO Vlaanderen)）
"A Money Doctor from Japan: Megata Tanetaro in Korea, 1904-1907"

豊山 亜希　（関西大学 EU- 日本学教育研究プログラム ポスト・ドクトラル・フェロー）
"The Orient Revisited: Re-Evaluating the Post-War *Nihonga* Movements in Relation to Post-Colonial Asia"

Welcome Party

2008 年 9 月 13 日（2 日目）

若手研究者による研究報告　会場：MSI Building, Faculty of Arts, Leuven

Session 1: Old and New Culture　Chair: 豊田 真穂　豊山 亜希

伊達 ひろみ　"Silk Road: Yokohama-Lyon, The Path of Franco-Japanese Exchanges since 150 Years Ago"
山口 哲史　"The Establishment of the Temple in front of the Tomb of Prince Shōtoku"
石飛 祐子　前田 理　登成 春江　「妖怪の変遷」
田村 唯史　年未 亮平　竹原 千恵「高松塚古墳―人物像でみる服制と儀式― 」
森下 真企　「グスク造営に対する按司の動向に関する考察」
辻本 麻衣　"Gender in Cooking Examined through *Ryori Bon* in the Edo Era"

Session 2: Art, Language and Literature　Chair: 大久保 朝憲　Willy Vande Walle(Full Professor, Japanese Studies, Catholic University of Leuven)

鈴木 義孝　" 'Subject' and 'Subjectivity' in the Japanese Grammar"
David De Cooman (PhD student, Catholic University of Leuven)　"Japanese Personal Name Categories: Reflecting the Trends of Society?"
谿 季江　"The Study of Japanese Art History by Jack Hillier: A Comparison with Ernest Fenollosa"
Anton Peersman(MA Japanese Studies, Catholic University of Leuven)　"Irony and *Hiniku*: Indicating Irony through Exaggerated Levels of Politeness"
川崎 千嘉　"The Myth to Which a Man Produces a Child: Logic of *Kojiki*"
高橋 真理子　"*Torikaebaya Monogatari*: A Story of a Peculiar Aristocratic Family in the Heian Era"

Session 3: Modernity and International Relations　Chair: Michael Schiltz

伊藤 満　"The Reconstruction of Modernity: A Fundamental Study of Foreign Settlement of Kobe in the Late 19th Century"
Elena Atanassova-Cornelis(Post-doctoral fellow, Catholic University of Leuven)　"Understanding and Teaching Contemporary Japanese Foreign Policy"
内海 寧子　"The Eyes of Visitors and the Eyes of Locals: Tourist Sights in 19th-Century Osaka, Japan"
小谷 仁美　"The Intercultural Connection in Relation to Women's Liberation Watched through Fashion"
Hanne Knaepen　(MA Japanese Studies, Catholic University of Leuven, ULB)　"Japanese and European Environmental Decision Making: The Public Policy Development"
朝原 広基　「大阪の能楽と豪商たち」

Extra Session : 漫画『ワンピース』の解釈
大島 薫　他

2008 年 9 月 14 日（3 日目）

フィールドワーク　ベギン会修道院（ルーヴェン）、ベルギー漫画センター（ブリュッセル）、王立美術館（アントワープ）

ＥＵワークショップ参加者のこえ

EU ワークショップでは、発表者としての研究、英語学習などの取り組み、日本の学会とは異なる雰囲気の体験、普段接することのないテーマである他の日本学についての聴講など、大変有意義な経験をすることができました。

私は建築に関する研究をしているため、ワークショップの終了後はオランダのロッテルダムで開催された国際学会の聴講に行きました。学会のテーマは建築の保存と活用についてでしたが、日本のことに関して多少の知識はあっても海外の研究事象の知識はなく、理解しかねることがありました。

そうしたことから、私達関西大学の学生と、ルーヴェン・カトリック大学の学生が、同じ「日本学」というテーマや共通意識を持っているからこそ、その研究に関しての専門領域に関わらず、それぞれの足場から意見交換ができるのだと考えました。だからこそたとえ聞き取れない英語があっても、他の資料や映像などから内容を補完することができるのだと、改めて感じました。

最後に、様々な先生方からご助力をいただき、このような貴重な経験をすることができたことにお礼申し上げます。特に発表の準備過程や、発表の内容、技術などに関しては至らない点が多々あり、ご迷惑をおかけする結果となりましたが大変刺激を受けました。こうした反省を踏まえ今後の活動へ活かせるよう、勉学に励みたいです。

文学研究科歴史学専修　博士課程前期課程 2 年　伊藤　満

晩夏、急に涼しくなった日本をあとにして、一人ベルギーへと向かった。EU ワークショップに発表者として参加するためである。出発の際、財布が見あたらず電車を一本後らせる、というちょっとしたアクシデントはあったが、何事もなく無事到着することができた。ともあれ、これが私にとって初めてヨーロッパへの旅であったので、その道のりはそれなりの緊張を強いられるものでもあった。

幾人かの参加者が集まって行くコースもあったが、考えていた予算をオーバーしてしまうので、個人で旅程を組み立てることにした。探し出した一番安いルートは、シンガポール経由ベルギー近隣国の空港着、そこから列車を使うルートだった。しかしこれはかなりハードなルートだったのである。初心者の気楽さで、あまり考えずにこのルートを選択したが、来年度以降履修する予定の方は要検討だ。お金で買える快適さというものがある。

とはいえこのルートも悪くはなかった。列車から見える欧州らしい風景や、お喋りは良いものだった。しかも、これは航空チケットしだいだが、複数の空港を利用して、行き帰りに他国へ足をのばし調査に赴くことも可能だ。私はパリ、アムステルダムに立ち寄ったが、アムステルダムへの列車では親切な老紳士に出会い、その日の宿まで送り届けて頂くという嬉しい経験が出来た。アムステルダムでは国立美術館を見学し、ドールハウスにおける台所空間を観察することができた。

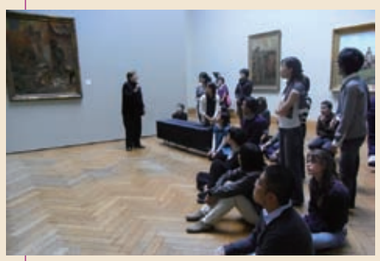
ワークショップ当日は、やはりかなり緊張した。慣れない英語での発表だったこともあったが、自分の研究内容についてどのような反応が得られるのかも大きな気がかりだった。聞きに来られた方は多くはなかったが、それでも日本ではなかなか得られないであろう視点の質問を受け、今後の研究にも役立ちそうだ。もし次回参加できるなら、質疑応答を英語で行うことが目標である。

文学研究科日本史学専修　博士課程前期課程 1 年　辻本　麻衣

オープニングレクチャー

セッションの様子

セッションの様子


フィールドワーク
（王立美術館・アントワープ）

「日本学フィールドワーク」科目　フィールドワーク実施報告

春学期　北陸地方フィールドワーク 平成 20 年 5 月 23 日（金）～ 5 月 24 日（土）

●担当者　米田文孝（日本学フィールドワーク主幹）、
内海寧子（リサーチ・アシスタント）、森下真企（ティーチング・アシスタント）

●参加学生　21 名

●実施行程

日　時	内　容
平成 20 年 5 月 23 日（金）	関西大学に集合 → バスで移動 → 一乗谷朝倉氏遺跡、資料館を見学（福井市）→ 金沢市内
平成 20 年 5 月 24 日（土）	尾崎神社・金沢城公園見学 → 兼六園見学→調査班毎に金沢市内の美術館・博物館・寺社などを調査

金沢市におけるフィールドワークでは、数組の班に分かれて調査を実施しました。見学先では自分の専門領域以外の知識を吸収しようとする積極的な学生の姿が見受けられ、「日本学フィールドワーク」科目が目標としている学際的研究の実践につながる調査となりました。

秋学期　滋賀県湖北湖東地域フィールドワーク 平成 20 年 11 月 28 日（金）～ 30 日（日）

●担当者　米田文孝（日本学フィールドワーク主幹）、
内海寧子（リサーチ・アシスタント）、森下真企（ティーチング・アシスタント）、
山口哲史（ティーチング・アシスタント）

●参加学生　15 名

●実施行程

日　時	内　容
平成 20 年 11 月 28 日（金）	JR 長浜駅集合 → 長浜まちづくり講演聴講 → 調査
平成 20 年 11 月 29 日（土）	調査（長浜市・米原市・彦根市・東近江市ほか）
平成 20 年 11 月 30 日（日）	調査 → 東近江市近江商人博物館見学。展示解説を聴講 → 五個荘のまちなみ見学

春学期のフィールドワークで得た経験をもとに、参加者各自が調査地域のなかで課題を見つけ、調査の計画を立案・実行することを目的にフィールドワークを実施しました。

参加者の調査例　「壬申の乱と湖北・湖東」、「湖東における渡来文化」、「琵琶湖の水運と商業」、「地震を通しての湖東・湖北地域」、「湖北の古墳について」

その他、NPO 法人まちづくり役場理事長・山崎弘子氏による長浜のまちづくり活動に関する講演を聴講し、近江商人博物館では学芸員・上平千恵氏による展示解説を聴講しました。

（ＥＵ－日本学教育研究プログラム　リサーチ・アシスタント　内海 寧子）

編集後記

EU- 日本学 NEWS「あかねさす」第 3 号をお届けします。

本号は、KU ならびに EU ワークショップを特集しました。KU ワークショップは 7 月に関西大学で、EU ワークショップは 9 月にルーヴェン・カトリック大学で、それぞれ開催され、日欧の学生が多数、参加しました。欧州の学生が日本語で、日本の学生が英語で、自分たちのトピックを報告し、議論するという機会はいうまでもなく、本プログラムのハイライトでもありますが、見ていてある種の達成感を覚えました。とくに EU での発表は、7 月の面接段階のたどたどしい発表からは予想もできないほどの向上がなされていました。夏季休暇中に学生に対し、集中的にトレーニングしていただいた Uva 先生の尽力のほどが偲ばれます。心よりお礼申し上げます。それでも外国語の運用能力では、日欧の間になお相当の格差があり、関西大学の学生諸君には意識的な鍛錬を求めたいと思います。

（ＥＵ - 日本学教育研究プログラム　代表　藪田　貫）

一乗谷にて

一乗谷朝倉氏遺跡にて

長浜市での聞き取り調査

近江商人博物館にて

EU-日本学プログラム推進室（総合研究室棟2F）

開室時間
月～金／ 10:00 ～ 17:00

住 所
大阪府吹田市山手町 3-3-35

URL
http://www2.kansai-u.ac.jp/eu-japan/

E-mail
eu-japanology@cm.kansai-u.ac.jp

TEL
06-6368-1111（+3979）